ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.19 No.8 August 2018

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

8

CONTENTS

- 巻頭言
  天を思う
  ／高見宇造 1
- ３代真柱様の思い出（最終回）
  「船遊び」と「仕切り根性」③
  ／井上昭夫 2
- 「元初まりの話」に登場する動物たち（31）
  「大龍」について ②
  ／佐藤孝則 3
- 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相（20）
  戦前のカナダ伝道と日系移民社会 ③
  ／尾上貴行 4
- 「おふでさき」の標石的用法（36 最終回）
  松尾市兵衛と「おふでさき」
  ／深谷耕治 5
- 伝道と翻訳 ―受容と変容の“はざま”で―（12）
  初期仏教に見る「ことば」の諸相 ①
  ／成田道広 6
- 日本語教育と海外伝道（新連載）
  天理教の日本語教育のはじまりの頃 ①
  大内泰夫 7
- 遺跡からのメッセージ（37）
  文化遺産を今に活かす⑤ 史跡公園に生まれ変わった唐古・鍵遺跡
  ／桑原久男 8
- コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論（18）
  アフリカ人の抵抗
  ／森 洋明 9
- ヴァチカン便り（33）
  時の流れとともに
  ／山口英雄 10
- 図書紹介（106）
  『ドイツ哲学史 1831-1933』
  ／金子 昭 11
- 思案・試案・私案
  人間の技術、そして生まれる命
  ／堀内みどり 12
- English Summary 13
- おやさと研究所ニュース 14
  新連載執筆のねらいと執筆者紹介／『グローカル天理』年間購読のご案内／日本移民学会第 28 回年次大会参加（尾上貴行）／『グローカル天理』合本のご案内／第 313 回研究報告会（澤井治郎）／平成 30 年度公開教学講座／天理台湾学会第 28 回研究大会が開催（金子昭）／『天理教事典第三版』案内

巻頭言

天を思う

おやさと研究所長 高見宇造 *Uzo Takami*

最近、他宗の教誨師研修会に招かれることが多くなり、私の心得として芥川龍之介の短編『蜘蛛の糸』（大正７年）を読み返している。これはアメリカの宗教学者ポール・ケーラスが書いた『Karma』を鈴木大拙が日本語訳した『因果の小車』が材源になっている。お話はこうである。

お釈迦様が蓮の池をご覧になると、そこは地獄に通じて多くの罪人がうごめいていた。その中にいたカンダタは、以前道端の蜘蛛を踏み殺そうとするが「無闇に命を奪うのは可愛想」と思い止まったことがあった。お釈迦様はそれをご存知で、たすけてやろうと天から蜘蛛の糸を垂らされた。カンダタは必死にその糸を伝い這い上がるが、見れば多くの罪人もその糸をよじ登ってくる。「糸が切れてしまう、下りろ」と叫ぶが、その瞬間に手にした糸が切れて再び地獄の底に落ちてしまうというお話である。どんな人間にも慈悲の心がある一方でエゴによって破滅もすることを描いている。人間世界には天から救いの糸が降りてくるが、それを取り逃がしてはいけないと言うことだ。私たちは天を思っているだろうか、カンダタのようになってはいないかと思わず自問してしまうのである。

ところで天と言うのは不思議である。私事で恐縮だが、若い頃、10 数年ほど布教専従の生活を送った。一軒一軒を訪ねて伝道するわけで、道が拓けるまでは随分と時間が掛かった。布教経験のある人はお分かりになるだろう。言いようのない息苦しい日々が続いた。人間世界に伝道するのだが、その人間世界に自分自身が息苦しくなってしまう。心を倒したことは、もちろん一度や二度ではない。そんな時、私は何度も天、即ち無限の天空を仰いだ。天理教は「世界一れつをたすけるために天降つた」と天から救いの道を人間世界につけられた教えである、親神は仰ぎ見る天の世界からこの道をつけられたと思うとなぜか心が晴れて、迷いや不安をその都度乗り越えることができた。真に不遜な言い方になるが親神と自分の立ち位置が確認できた。これは本当に不思議な体験であった。「めん〳〵それ〳〵心と心、天が見通しである。」（39・12・13）という「おさしづ」には身も心も救われた。後日、「空を思わん者は無い。空ばかり見ては踏み損う。旬という道という理がありて、空という。」（32・2・2）との「おさしづ」を読んだ時はなるほどと思ったものである。

「おふでさき」には、

このよふを納も上天もかみ
上と神との心わけるで　　四号 104

とあるように、天の思いは人智を超えたものだと言われる。人智に行き詰まれば天を思うしかない。

さてカンダタの手にした蜘蛛の糸が切れたのは己一人が救われたいと思ったからである。それが欲の心だと芥川は言いたかったのだろうか。「みかぐらうた」には、「よくにきりないどろみづや　こゝろすみきれごくらくや」（十下り目 4）と欲の心を離れることを説かれる。では欲の心とは何か。『蜘蛛の糸』に習えばカンダタのように「下りろ」と言ってしまう心となる。自分の救いだけを求めると結果はカンダタの様になってしまうのである。

「心の事情大変と思うやろ。なれど、一つ方法というものは、天にある〳〵」（29・5・20）は明治 29 年に内務省訓令が発せられ国家当局の取締、弾圧が激化した際に先人を勇気づけられた「おさしづ」の一節である。親神は、「どれだけ危ない所でも怖わい所でも、神が手を引いて連れて通る。天の綱を持って行くも同じ事。」（33・2・11）と言われる。自らを見失わないように欲を忘れて、しっかりと「天の綱」を握りしめねばと思う。